

教育研究試論

——形成的環境—主体(person)の位置——

佐 藤 良 吉

目 次

(1)環境と主体(一)環境の作用(二)主体の位置 (2)主体の体験—自然との出会い(一)季節の体験(二)故郷の山河(三)文芸のなかの主体(四)自然体験と主体 (3)主体の体験—社会との出会い(一)社会の統制(二)家族制度(三)婚姻制度(四)親子関係(五)子供の社会(六)学校の統制(七)職場の規則(八)社会統制と主体(4)慣習(禁忌)や流行と主体(一)慣習(禁忌)(二)風潮や流行(三)流行と主体 (5)体験の個性化と一般化(一)体験の深化(二)個性化(三)一般化

(1) 環 境 と 主 体

(一)環境の作用 ひとをとりまく外界(外部条件),あるいは環境(environment)は,ひとの生存や生活に,はかり知れない作用をもっている。事実,日光や空気,気温や湿度,降雨や降雪などの気象条件はもとより,山河や海浜,丘陵や平原,湖沼や樹林などのあらゆる自然条件も,どれ一つとして,ひとの生存や生活に,密接微妙なかわりのないものはない。しかもひとはそのうえ,ひとの形成陶冶にかかわる,形成的環境(educational environment)とも出会っている。具体的には第一に,上出の自然条件のほか,第二に社会,第三に文化,第四に人間の四つであるが,これらはいずれも,ひとの形成諸因として,ひとの陶冶に大きな作用をもっている。このことはいいかえれば,ひとは誰でも自然の影響,社会の同化,文化の形成,人間の教育の諸力に促されて,ひとから人間にまで,形成されるほか

ないということである。

自然がひとの形成に、大きなかわりをもっていることは、誰もが知っている。社会の同化力の底深さについては、日常身近かな生活の事実にてらしてもわかる。文化の形成力や、人間の教育力の大きさについては、いまさらいうまでもない。いずれにしてもこれらの形成作用が、ひとの陶冶に、はかり知れない影響をもっていることは、「教育研究試論」既載、つぎの諸項にてらしてもわかる。

(1)形成的環境—自然(1)自然の影響(2)生活と自然(3)自然と文芸(4)子供と自然(5)子供の歌(6)いわおの顔(7)自然と思索(8)風土と人間(9)自然観 (2)形成的環境—社会(1)社会と人間(2)生活習俗(3)年中行事(4)社会の機能 (3)形成的環境—文化(1)人類の祖先(2)人間の特質(3)文化の始源(4)文化の三方面(5)物質文化(6)精神文化(7)制度的文化(8)文化の形成力(9)書物の影響(10)芸術の薫成(11)宗教の触発 (4)形成的環境—人間の教育力(1)形成要因(2)人間の教育力(3)家族の特質(4)家族の感化(5)教師と子供(6)教師の触発(7)友人の影響(8)子供の発見(9)子供に学ぶ(10)ひとの影響(11)未知未見のひと

以上これら既載の例からもわかるように、ひとをとりまく外界、とりわけ形成的環境は、ひとの形成陶冶に、はかり知れない作用をもっている。しかもその作用は、例外なくすべてのひとを、その影響範囲につつまこむ底深さをもっている。この点でいえば、ひとがひとでありつづけるかぎり、誰ひとり、その影響範囲の圏外に、逃れ去ることのできるものはいない。いかえればひとと形成環境とは、二つながら密接に結びついていて、この両者を切り離して、ひとの形成は考えられないということである。事実、ひとが形成環境から隔離されれば、ひともちまち、他の動物と同じ状態にまで転落するほかなくなる。そのことは例えば、アヴェロン野生児（「Rapports et mémoires sur le sauvage de l'Aveyron」吉武弥正訳）の場合や、孤立児 カスパー・ハウザー（「Caspar Hanser」生和秀敏訳）の先例、あるいは Gessell（1880-1961）の「狼に育てられた子」（「Wolf-Child human child」生月雅子訳）所載、つぎのことばにてらしても推測される。

大人が自然から発足すると同じように、赤ん坊も、ある意味で自然から出発する。したがって、発育の初期にある赤ん坊は、自然と一体であり、自然の一部であり、実に自然が咲かせた花そのものである。——H・D・ソーロー（1841年3月7日コンコードで書かれた「日記」から）体力も生得観念も持たずに、地球上にほうりだされ、自分の天性の根本法則にすら、自力ではついていけないような人間が、とうぜんのものとして、万物の霊長の地位にあがるのであが、そののできるのは、人間が社会のまっただなかにいるばあいにかぎる。——J・M・Gイタール（1807年パリで出版された「アペロンの子生児——その報告と回想」から）たしかに私は人間です。しかし、自分は狼だ、と今夜私にいわせたものが、私の胃袋のなかにあるのです。（ラドヤード・キップリング著「ジャングルブック」から）

いずれにしてもひとはこのように、誰ひとり環境の影響圏外で、満足な生活をいとなみ、成長をとげることのできるものはいない。この点でみるかぎり、ひとは結局、環境の支配影響をまぬがれえない、宿命的存在ということになる。このことからひとは、しばしば環境の作用の所産、あるいは環境の子供ともいわれ、環境はひと（子供）における、母のようなものであるとみられる理由もうなづける。

(二)主体の位置 しかし他方、環境とかかわるひと（person）の側に目をうつして考えてみると、そこに主体としてのひとが、確かな位置を占めて息づいていることに気づく。このことはひと（主体）を無視しては、環境の作用はありえないし、環境自体解体して、存在しなくなることを意味している。事実、環境がどれほど大きな作用をもっているとしても、それとかかわるひと（主体）がいなくてはどうにもならない。ひとは環境の所産、あるいは環境が産みだす子供、または環境はひと（子供）の母のようなものであるといっても意味がない。それはちょうど、子供がいなくては母とはいわないように、ひと（主体）がいなければ、環境とはよばないのと同じである。以上このことを念頭に、環境の意味について考えてみると、環境はもともとひと（主体）を前提に、はじめて成り立つ概念であることがわかる。このことはひとを捨象すれば、環境も解体して、抽象に還元してしまうことを意味している。これをまた環境は、ひと（主体）を中心とみた概念で

あって、ひと（主体）を核（core）に、再配列された外界のことであるといっても同じことになる。Dewey（1859-1952）が「民主主義と教育」（「Democracy and Education」松野安男訳）のなかで、環境の本質と意味を、つぎのように述べているのも同じ趣旨である。

「環境」environment とか「生活環境」medium という語は、個体を取りまく周囲の事物より以上のものを意味する。それらの語は、周囲の事物がその人独自の活動的傾向に対してもつ特定の連続関係を意味するのである。……とりわけ人間の場合には、彼から空間的にも時間的にも遠く離れている事物が、彼の身近にある事物よりも、より確実に彼の環境を成すことがあるのである。人の方もそれとともに変わって行くようなものこそ、その人の本当の環境なのである。たとえば、天文学者の活動は、彼が注視したり、それについて計算したりする星とともに変わる。彼を直接とりまいている事物のなかでは、彼の望遠鏡がもっとも密接な彼の環境である。また、好古研究家としての、環境は、彼が関心をもっている遠い昔の時代の人間の生活や、彼がその時代と関係をつけるために用いる遺物や碑文などから成り立っているのである。要するに、環境は、ある生物に特有な活動を助長したり、妨害したり、刺激したり、抑制したりする諸条件から成り立っているのである。水が魚の環境であるのは、それが魚の活動——つまり魚の生活——に必要なからである。北極探險家が北極に到達することに成功しようとしまいと、北極が彼の環境の重要な要素であるのは、それが彼の活動を限定し、彼の活動を他のものとは異なった独特のものにするからである。生活は、単なる受動的生存（そういうものがあると仮定してのことだが）にすぎぬものではなく、行動の仕方を意味するのであるからこそ、環境または生活環境とは、この活動の中に、それを維持したり、挫折させたりする条件として、入り込むものを意味するのである。

環境（外部条件）とひと（主体）の位置をこのように把え、環境の形成作用を考えてみると、その影響力の大きさを強調すればするほど、それとむきあうひと（主体）の位置の重要さが、あらためてうかびあがってくることに気づく。環境におけるひと（主体）の位置が、いっそう問いかえされ、見つめなおされる必要があるのもこのためである。

(2) 主体の体験—自然との出会い

(一)季節の体験 以上みてきたように、ひとにおよぼす環境の作用という場合、つねにひと（主体）が環境の中心に位置していることがわかる。事実、ひとは誰でも環境の主座にいて、両者相作用の過程で、環境を主体的に体験している。このような実例は、日常身近かな生活のなかで、かぎりなく見つけ出すことができる。例えばひとが自然（環境）と出会う、日常体験についてみてもそのことはわかる。自然と出会うひとの体験のうち、ひとびとが年毎に迎える四季（春夏秋冬）、仮りに春について考えてみると、春は一般に生気の蘇える、それだけに誰からも、待ち望まれている好季節のように思われがちである。そのことはつぎの詩「早春」や、歌曲「宗谷岬」などの曲想をみてもわかる。

(1)早春（佐藤吉彦詩） (1)北風がマントをぬぎすてると／春の息づかいがせわしくなります (2)北風が翼を休めると／空は絹色にかわり／椿は紅の化粧をし／小鳥は歌い／梅はリボンをつけはじめます (3)北風が足を傷めると／霜枯れの野に／落葉の樹林に／畑なかの小径に／谷川のせせらぎに／春の光が微笑みはじめます (4)ああ、いま自然はめぐりはじめました／北風の旅支度ができると／雪国は春にかわるのです (2)宗谷岬（船村徹作曲） (1)流水とけて春風吹いて／はまなす咲いてカモメも鳴いて／はるか沖ゆく外国船の／煙もうれし宗谷岬／流水とけて春風吹いて／はまなすゆれる宗谷岬 (2)ふぶきが晴れて／しばれがゆるみ／なぎさの貝もねむりがさめた／人の心のとびらを開き／海鳴りひびく宗谷の岬 (3)しあわせもとめ／さいはての地に／それぞれ人は明日に祈る／波もピリカもこもりのように／思い出のこる宗谷岬

たしかに春には椿や梅、桃や桜、チュリップやすみれなどのほか、たんぽぽなどの野草も、にぎやかに花をつける。鳥は歌い、蝶は舞い、春霞がたなびいて野山や人里は華麗な絵巻につつまれる。とりわけ春の季節には、日本人にとって桜の花はつきものである。事実、桜の花種も染井吉野をはじめ、江戸彼岸や八重枝重、関山八重や霞桜、蝦夷山桜などと多様で、花はひとびとを心ゆくまで楽しませてくれる。今日でも地方に行けば、千里

の長堤が、みな桜並木というところも珍らしくない。往昔は東京などの近郊でも、そのような風景が見られたはずである。そのことは滝廉太郎作曲、つぎの「花」(明治33年)によっても、当時の有様の一端が偲ばれる。

花(武島羽衣詩) (1)春のうららの隅田川／のぼりくだりの船人が／權のしずくも花と散る／ながめを何にたとうべき (2)見ずやあけぼの露浴びて／われにもの言う桜木を／見ずや夕ぐれ手をのべて／われさしまねく青柳を (3)錦おりなす長堤に／くるればのぼるおぼろ月／げに一刻も千金の／ながめを何にたとうべき

このようにみてくると、春は万人一様に、誰にでも喜ばれる季節のように思われてくる。たしかに春になると、多くのひとびとが花を求め、また山野の行楽に出かけていく。桜の木の下にむしろを広げ、酒肴を嗜み、管弦にあわせて、高歌高唱しているひとびとの姿は、どこにでも見かけられる。こうしてひとびとの多くは、春の季節を堪能し賛美し体験する。しかし多くのひとびとが春の季節を喜び、享樂しているからといって、万人が一様に春と出会っているわけではない。多くのひとびとが春を謳歌している一方で、春の季節を苦手とし、厭わしく感じているひともしらざる。事実、春には春の不安定な季節の変化から、生体リズムのバランスを失ない、鬱病や躁病、女性に多い無食性過食症、梅の季節に多い不安神経症や、彼岸どきの不眠症、このほかストレスが蓄積して、五月病や登校恐怖症に悩むひとも多い。平井富雄著「心の四季」によれば、この季節特有の心の病気の一例を、つぎのように述べている。これをみても同じ春の季節であっても、そのうけとり方は、ひと(主体)によって万様であって、ひとりひとりみな異なっていることがわかる。

春たけなわである。日本の春は美しい。清少納言は「春は曙」と枕草子のなかで、その美しさを賞でている。しかし、心の領域となるとどうであろうか。卒業、進学の子弟をかかえる主婦の心には、春を賞でるゆとりは季節の移り変わりと、一致しては現れてこない。多忙につぐ気苦労のはてに、強い「疲労」におそわれている方々も多かろう。これに、ご主人の転勤、身内の人たちの慶弔事が重なる

と、疲労の度はますます強まるに違いない。家庭の主婦にとっては、心休まる季節とは思えない方々が、最近になって、しだいに増えているのではなからうか。

「腰が痛い、頸筋がこる、頭のうしろが痛み、かつ重い」という症状におそわれる主婦が、「更年期障害では？」とあって、私たちの診察を求めてこられる。しかも、30歳代の女性に多い「専業主婦症状群」であるから、仕事に翔んでいる女性より、彼女らの心身の負担は、いっそう大きいのではあるまいか。

ところで、そういう主婦のご主人はどうかというと、これまた同じように、「妙に疲れて不眠がち、体調が乱れ、気分がゆううつ。理由もないのにイライラする……」という訴えで、直接、私たち精神科医のもとに相談にこられるビジネスマンが多くなっている。なかには、ご夫婦で相談にみえる場合さえある。精神医学では、これらを「疲労性うつ病」、あるいは「疲労性うつ型神経症」と呼んでいる。要するに、心身ともにすりへらす忙しさをいとわずに、子供のため、家庭のため、そして会社のため、そういう他我指向型の努力が、努力の最中は意識されないままに、やっと暇ができた4月半ばに、心身両面にわたる「病的疲労」として現れる心のトラブルといってよい。

以上このようなことは、他の季節、例えば夏や秋、あるいは冬の場合についても同じようにいえる。激しい夏の季節に魅了される若者がいる一方で、同じ若者世代でも、夏の激しさを苦手と感じているものも多い。山や高原なら夏もよいが、夏の海はきれいというひともいる。季節の体験の仕方は、このようにそれ（環境）とかかわる、ひとの違いによって異なっている。事実、夏の季節に戸外で労働に従事するひとには、夏は仕事の能率のあがらない、やりきれない季節であっても、子供にとっては、子供の天国のようにうけとられている場合がある。とりわけ海は子供には、無限の魅力をもった存在として感じられることが多い。しかし同じ海でも、仮りにここに多感な青年がいて、海辺を徘徊して感慨にふけっていたとすれば、その若者には海は、現前の実態としてよりも、追想追憶の誘因としてあらわれてくる。つぎの小学唱歌「海」（井上武士作曲、昭和16年）と、歌曲「浜辺の歌」（成田為三作曲、大正7年）を比較して、口ずさんでみてもそのことはわかる。そこには現瞬を体験している子供（主体）と、過去を追体験している若者（主体）がいる。同じ海の場合でも、それとむきあうひと（主体）

が違えば、同じ海が異なってあらわれる証拠である。

(1)海(林柳波詩) (1)うみはひろいなおおきいな／つきがのぼるしひがしずむ
 (2)うみはおおなみあおいなみ／ゆれてどこまでつづくやら (3)うみにおふねをう
 かばして／いってみたいなよそのくに (2)浜辺の歌(林古湊詩) (1)あした浜辺を
 さまよえば／昔のことぞしのぼる／風の音よ雲のさまよ／よする波もかいの色
 も (2)ゆうべ浜辺をもとおれば／昔の人ぞ忍ばる／寄する波よかえす波よ／月
 の色も星のかけも

(二)故郷の山河 ひとは以上みてきたように、自分を環境の中心において、
 自分(主体)とのかかわりのなかで、まわりの環境条件と出会っている。
 そのことは上述諸例のほか、同じ自然とむきあう場合でも、例えばひとが
 故郷の山河をみる場合と、他郷の山河に出会う場合とを比較してみてもわ
 かる。故郷と他郷の場合にも、そこに山や河があり、田野がひらけ、樹木
 が生い茂っているなどの事実、それほど大きな違いがあるわけではない。
 しかしひと(主体)がむきあう山河の体験は、故郷と他郷の場合とではまっ
 たく異なっている。故郷の場合には山河は、自分の原体験をふくむ山河で
 あり、樹も草も花も鳥も虫もけものも、空や雪や風や光や闇すらも、こと
 ごとく自分(主体)自身とかかわりをもっている。他郷の場合は同じ山河や
 風景とはいっても、山河一般としての山や河であって、故郷のような直接
 的、限定的な山河ではない。いいかえればひとは故郷の山河とは、自分と
 のかかわりで体験し、他郷の場合には、山河一般としてしか出会わないと
 いうことである。そのことは石川啄木(1886—1912)の歌集「一握の砂」所
 載、つぎの故郷を歌った短歌をみてもわかる。そこにはまぎれもなく、故
 郷を原風景として体験した、体験主体者としての啄木がいる。

かにかくに浜民村は恋しかりおもいで山おもいで川／ふるさとの山に向い
 て言うことなしふるさとの山はありがたきかな／やわらかに柳あおめる北上の岸
 辺目に見ゆ泣けとごとくに／わが家のかの窓にこそ春の夜を季子とともに蛙聴き
 けれ／不来方のお城の草に寝ころびて空に吸われし十五の心／ふるさとの空遠み
 かも高き屋にひとりのぼりて愁いて下る／今のうちに忘れぬうちに故郷の村の地

図を書いて置かんと思ひ立ちたる／ふるさとの土をわが踏めば何がなし足軽くなり心重れり／ふるさとの麦のかおりを懐しむ女の眉にこころひかれき／ふるさとの停車場路の川ばたの胡桃の下に小石拾えり／汽車の窓はるかに北にふるさとの山見えくれば襟を正すも

啄木はよく知られているように、明治19（1886）年、岩手県日戸村に生まれ、生涯の多くの期間、貧困と病患に悩みながら、多数の作品を残し、結局、同44（1912）年4月、故郷の山河を偲びつつ、26歳の若さで死んだ。阿部正路著「石川啄木」（「風土と詩人たち」所載）は、啄木と故郷の結びつきを、「原風景としての故郷」として、つぎのように記している。これをみても故郷の山河にむきあう、体験主体者としての啄木（主体）が、つねに山河意識の主座に位置していることがわかる。

近代日本の青年たちの多くは、たえず啄木の詩歌の世界を、自分自身の心のふるさととした。かにかくに渋民村は恋しかりおもひでの山おもひでの川／思い出の山は——、そして思い出の川は、「ふるさと」に限定されることによって一層高まり、そして深まる。この、「一握の砂」初出歌における思い出の山は、姫神山と岩手山であり、思い出の川は、北上川と考えてよいだろう。一首の中に、渋民村が限定されていることによって、それは一層明らかであり、その渋民村は、啄木にとって、かにかくに——とにもかくにも恋しい故郷であった。ふるさとの山に向ひて言ふことなしふるさとの山はありがたきかな／やはらかに柳あをめる北上の岸辺目に見ゆ泣けとごとくに

かくに渋民村は——における「おもひでの山」や「おもひでの川」は、同じ「一握の砂」で、このように具体的に歌われているのみならず、「荒城の月」に曲を同じくする渋民小学校卒業式で歌われた「別れ」の詩は「心は高し岩手山／思ひは長し北上や」と発想されている。ならば、ふるさとの山は、岩手山と限定すべきだろうか。それはそうではあるまい。ふるさとの山は、実際には姫神山をも含む、「ふるさとの山々」なのだ。更には「汽車の窓／はるかに北にふるさとの山見え来れば／襟を正すも」というふうに、「ふるさとの山々」は、啄木にとって、心から敬うべき対象として存在しうたわれる。

（三）文芸のなかの主体　ひとが自然風景と出会う体験は、ひと（主体）が故郷の山河とむきあう場合だけではない。日常ささやかな、何気ない生活のた

たずまいのなかにも、その機会はある。窓から射しこむ陽の光、屋根のかなたの空の広ろがり、葉をゆする樹々の絵模様、やわらかに鳴る寺院の鐘、悲しく歌う樹のうえの鳥、街からくる雑沓のざわめきなど、どれ一つとってみても、ひとの自然体験を触発する誘因とならないものはない。Verlaine (1844-96) のつぎの詩「無題」(「珊瑚集」所載) をみても、そのことはよくわかる。そこにもまた、まぎれもなく、詩の日常風景と出会っている、主体生活者としての作者自身がいる。

(1)空は屋根のかなたに／かくも静かに／かくも青し／樹は屋根のかなたに／青き葉をゆする (2)打仰ぐ空高く御寺の鐘は／やわらかに鳴る／打仰ぐ樹の上の鳥はかなしく歌う (3)ああ神よ／質朴なる人生は／かしこなりけり／かの平和なる物のひびきは／街より来る (4)君過ぎし日に何をかなせし／君今ここに唯だ嘆く／語れや君そもわかき折／なにおかなせし

自然との出会いの中心に、ひと(主体)がいることは、このほかにもかぎりなく、類例をみつけ出すことができる。例えば松尾芭蕉(1644-94)の場合には、芭蕉は自分を介して、「奥の細道」に出会っていたはずであり、国木田独歩(1871-1908)は、自分を中心に「武蔵野」を体験していたはずである。徳富蘆花(1868-1927)が「自然と人生」や、「みみずのたわこと」に出会ったのも、同じように自分を中心としてのことであり、島崎藤村(1872-1943)が「エトランゼエ」でありえたのも、そこに藤村自身がいたからにはほかならない。自然とのかかわりの中心に、つねにひと(主体)が位置していることは、他の文学作品、例えば短歌や俳句の諸作をみてもわかる。試みに近世の俳句のなかから、仮りに芭蕉と蕪村(1716-83)の秀句のいくつかをひろい出してみると、つぎのようなものがある。これをみても芭蕉の主情主観的な俳句には、主情主観的な芭蕉がおり、客観描写的な蕪村の句には、客観的で絵画描写的な蕪村がいることに気づく。

(1)松尾芭蕉 梅恋て卵の花拝むなみだかな／草の戸も住みかわる代ぞ雛の家／行く春や鳥啼き魚の目は泪／石の香や夏草赤く露あつし／夏草や兵どもが夢のあ

と／まゆはきを俤にして紅粉の花／あかあかと日はつれなくも秋の風／塚も動け
わが泣く声は秋の風／石山の石より白し秋の風／寂しさや須磨にかちたる浜の秋
／うき我をさびしがらせよ閑古鳥／水仙や白き障子のともうつり／旅に病んで夢
は枯野をかけめぐる (2)与謝蕪村 春の海ひねもすのたりのたりかな／葉の花や月
は東に日は西に／春の水すみれつばなをぬらしゆく／燭の火を燭にうつすや春の
夕／夜桃林を出てあかつき嵯峨の桜人／夏山やうちかたむいてろくろ弓／水深く
利鎌鳴らす真孤刈／名月や神泉苑の魚躍る

以上このことは、このほか中国の詩、例えば唐の著名な詩人、李白(701-62)の「静夜思」についてみても、同じようにいえる。この詩を吟誦して気づくことは、月光を客観している作者と、静かな夜のものの思いに耽っている主情主観的な作者とが、同時共在しているということである。斉藤响解説「唐詩選」によって、詩の大意を鑑賞してみるとつぎのようになる。

牀前看月光(牀前月光を看る)／疑是地上霜(疑ふらくは是れ地上の霜ならんかと)／挙頭望山月(頭を挙げて山月を望み)／低頭思故郷(頭を低れて故郷を思う)——(寝台の前が明るく白く輝いているのを見た。おや、地上に霜がおりていると思った。しかし、頭をもたげて空をあおぐと、山のうえにかかった月を見た。ああ、月だったのか、とまたうなだれて、故郷のことを思いつづけている自分だ。)

(四)自然体験と主体 このようにみてくると、自然の風物や事象は、眺められる自然の側にあるのではなく、眺めるひと(主体)の側の認識にあることがわかる。ひと(主体)がいなければ、眺められる自然そのものも、存在しなくなるのはこのためである。事実、ひとがむきあう自然の体験は、あるときは故郷の山河であったり、信州や東北の山野や河川の眺めであり、山陽山陰の海浜なのであって、ことごとく自分自身と限定的、直接的なかわりをもっている。このことは鳥や虫の場合でも、また同じようにいえる。例えば鳥や虫の鳴き声にしても、それは単に聞えるのではなく、ひと自身が聴いているのである。聴いている自分自身(主体)がいなければ、鳥や虫の鳴き声も聞えてはこない。うぐいすの鳴き声がホーホケキョ(法華經)

と聞え、このはずくの鳴き声を仏法僧と聴くのも、そこに日本人という、仏教思想を下敷にした、ひと（主体）がいるからである。すぎ去っていく夏を惜しいと思えばこそ、蟬の鳴き声もつくづく惜しいと聞え、冬の仕度の心がけに忙しいから、こおろぎの鳴き声も、つづれさせと聴えてくるのである。池田弥三郎「風景論」（「読売新聞」所載）はそのことを、「鳥の声や虫の声を、そう聞きとるこちら側の心がまずあるからであって、鳥や虫が日本語でそう鳴きうたい、呼びたてているのではない」と、つぎのように述べているのも同じ趣旨である。ここにも自然のかかわりの中心（主座）に、主体者としてのひとがいることがわかる。

風景というものは、ながめられる自然界の側にあるのではなく、ながめる人間の側にあるものだ。そこに、ながめる人間がいなければ、そこに、風景などというものは、存在しえないのである。それは、たとえば、鳥や虫が人間のことで鳴きたてるのに似ている。われわれ日本人にとって、ある過去の時代に、仏教の知識が行き渡っていたから、鶯（うぐいす）は「法華経」と鳴き、このはずくは仏法僧と鳴いたのである。その前の日本人にとっては、鶯は「人来、人来」（ヒトク、ヒトク）と鳴き、今の無心の子どもの耳には、このはずくは、ただ「プッカンプン」と鳴いているに過ぎない。

過ぎて行く夏との別れに、やるせない思いがあればこそ、蟬（せみ）も「つくづく惜しい」と共鳴してくれるのだし、歩みよる長い冬を思い浮かべて、ため息づく心があればこそ、きりぎりす（今のこおろぎ）も「つづりさせ」「つづれさせ」と、縫いものの手わざをせきたてて鳴きたてたのである。「一筆啓上、火の用心、おせん泣かすな、馬肥やせ」などという文句が、常識化しているころには、小鳥も「一筆啓上つかまつる」と鳴き、あの世から、この世の人の魂を、誘い出しに来る鳥だと思えばこそ、ほととぎすは「死出のたおさ」を呼びたてたのである。鳥は、日本人には日本語で鳴き、虫も、日本人の時代時代の生活の中で鳴いている。鳥の声、虫の音を、そう聞きとるこちら側の心がまずあるのであって、鳥や虫が、日本語でそう鳴き、うたい、呼びたてているのではない。

風景も、美しいと見、寂しいとながめる人がそこにいなければ、単に、不統一の自然そのものがそこにあるだけのことだ。そして、何をもって美しいと見、どのような自然を寂しいとながめたかは、かつて、それを美しいと発見し、寂しいと描いた「芸術」が先行している。清少納言が、秋は夕ぐれ、と言った。秋の風景は、夕ぐれどきが一番いい、とみたのである。すると／心なき身にもあはれは

知られけりしきたつ沢の秋の夕ぐれ／むらさめの露もまだひぬまきの葉に霧たちのぼる秋の夕ぐれ／見渡せば花ももみじもなかりけり浦のとまやの秋の夕ぐれ／と、歌人たちは秋の風景を発見していく。しかし、何も夕ぐれは秋に限るものではない。春にも夕ぐれどきの時刻はある。そして別の歌人は、ふとそこに、春の夕ぐれの風景を発見する。どうして、夕ぐれは秋だ、とばかり思っていたのだろうか、という反省とともに、春の夕ぐれの風景が描かれる。見渡せば山もと霞むみなせ川ゆうべは秋となに思ひけん／こうして、この歌以後「春はあけぼの」の風景に、われわれは春の夕ぐれの風景を加えたのである。

日本人にとって、日本の風景は、少なくとも、日本の文学が先行する。春になると梅が咲くのではない。自然界の梅は、冬のうちから咲いている。冬至梅（とうじばい）という名の梅もあるくらいで、事实は、春にさきがけ、まだ春の来ぬうちに咲いている。しかし、日本の文学の描いた梅は、春の花である。春の季節の到来を告げ、暦が春に移行するとともに梅は咲くのである。不統一で、勝手気ままな自然界を、文学が、節度あるものに統一し整理してみせると、われわれの風景は、心の中にそうした秩序をもって、展開するのである。／目には青葉山ほととぎす初がつを／季節の素材を、投げだし、られつしているだけだが、このばらばらな素材のうしろに埋積している「文学」が、われわれの心に、さわやかな初夏の風景を、描きだし、目前にまざまざと、初夏の風景を現出してくれる。文学は、もっと突き進んで、そこに人のいる風景までも、リードしてしまう。あなたを待っているときには、雨が降るのである。自然界はかかわりなく、現代の男女のデートの事実としては、風が吹くこともあるだろう、日が照ることもあるだろう。しかし、少なくとも、現代の大衆歌謡における、恋愛風景は、雨に濡れている。それは、実際の人生の恋愛風景ではない。しかし、日本人は、雨に泣き、雨に恋い心をそそられる。日本人の恋愛風景は、ほとんど、しっとり雨にぬれている。それは、江戸時代もそうであったし、遠く平安朝時代でもそうであった。文学が、人生の中から、雨にぬれる恋愛風景を切りとって来たために、それ以来日本人の恋愛風景は雨にぬれている。つまり風景は、ながめる人間の側にあるものなのである。

（3）主体の体験—社会との出会い

（一）社会の統制　ひとは以上みてきたように、自分を環境の中心軸にしなから、自然などの外部条件とむきあうとともに、また社会の諸条件や事象とも出会っている。社会の特質の一つは、社会はひとの集りではあるが、単なる群衆ではないという点にある。社会が単にひとびとの集り、群衆で

ないのは、社会にはひとびとを統制支配する諸条件、例えば制度や組織、体制や様式、伝統や価値観、習慣や習俗、約束ごとや契約があって、ひとびとがその支配統制下で、生活していることによっている。この点でみるかぎり、ひとが社会のなかで共同生活をいとなもうとすれば、当然これら社会のもつ社会維持機能に、服従しなければならないということになる。事実、ひとがこれら社会のもつ、維持機能を見れば、社会の存続も発展ものぞめなくなる。社会の維持発展が不可能になるだけでなく、社会の諸制度は解体して、ひとびとも単なる鳥合の衆に転落する。社会が社会の維持発展のために、ひとびとを社会のめざす価値の方向に、統制拘束の機能を維持しようとするのは、あたりまえのことである。

(二)家族制度 そのことは例えばひとの集りである、家族の場合についてみてもわかる。家族もひとの集団ではあるが、単なるひとの集りではない。それは家庭という場をともにする、血縁同士の集りである。しかもそのうえその集団は、家族制度という約束や、きまりによって支えられている。この意味でみれば、家族制度というのは、具体的には夫婦や親子、兄弟姉妹など、家族相互間の約束ごととのうえで成り立つ、生活制度といっても同じことになる。事実、夫婦や親子、兄弟や姉妹などの間に、その関係維持のためのきまりがなければ、家族関係や家庭は崩壊する。このためひとびとはその必要から、とりわけ戦前においては親子や夫婦、兄弟姉妹間の人倫や道徳を重くみ、また法律においても民法に厳しい規定を設け、その維持存続を保障しようとしてきた。第二次大戦後は、我が国でも法律が改正され、家族制度の規定(民法)も緩和されたが、旧民法(明治29年制定)においては、制約規制の拘束はきびしかった。旧民法の法規定は、旧藩封建社会の武士層の考え方を継承して、個人の人権や独立よりも、「家」の觀念が中心に成り立っていた。このため「家」には戸主(家長)がいて、家族の扶養の義務を負う反面、家族の居所の指定や、婚姻の許諾など強い権力(戸主権)をもっていた。また家督は長男が相続し、妻は夫の許容がなけ

れば、法律上有効な契約も結べず、自分の財産の管理権すら認められていなかった。このほか男女間の不公平が目立ち、母親は原則として、子供を監督あるいは保護、または教育するなどの親権もなかった。旧民法と新民法の家族制度の規定の要点を、両者比較（カッコ内は新民法）対照するとつぎのようになる。いずれにしてもそこには、家族制度の統制原理が、機能していることは確かである。

(1)婚姻の要件 (1)男は満17歳、女は満15歳以上とする。(男は満18歳女は満16歳以上) (2)父母の同意を必要とする。但し男が満30歳、女は25歳以上の場合は同意を要しない。(成年者は当事者の自由、但し未成年者の場合は同意を必要とする) (2)夫婦の関係 (1)妻は夫の家に入り、夫の氏を称する。(新族をつくる。氏は夫と妻のどちらにしてもよい。) (2)家庭生活に要する費用は夫が負担する。(家庭生活に要する費用は、夫婦で分担する。) (3)妻の財産は夫が管理する。(夫と妻の自分の財産は各自で管理する。) (4)夫婦どちらの財産か明らかでないものは夫のものとする。(夫婦共有財産とする。) (3)親権の行使 (1)父が家にあるかぎり父が行なう。(夫婦が共同で行なう。) (4)相続 (1)長男が戸主権と「家」の財産を相続する。(子は等しく親の財産を相続する。) (2)家督相続者は少なくとも財産の $\frac{1}{3}$ を相続する。(配偶者はつねに相続人となる。)

(三)婚姻制度 家族相互に以上のような、家族関係を拘束統制する、制度上の社会統制があるように、夫婦の場合にも、婚姻制度上の制約や風俗習慣上の約束がある。夫婦は結婚した以上、法律上の規定をまつまでもなく、たがいに信頼と愛情を保持し、円満な両性関係を継続していく義務がある。困難に出会えば力をかし合い、病患にかかればいたわり、幸福や不幸を分けあい、苦楽を共にしていくことが求められる。信頼と愛情を失なえば、外形は夫婦であっても夫婦とはいえない。同じ屋根の下で暮していても、夫婦関係は破綻している。民法では夫婦関係維持のために、法律上婚姻関係の解消には制限を設けている。民法第770条によれば、裁判上離婚の訴えを提起できるのは、つぎの五つの場合に限られている。(1)配偶者の不貞な行為。(2)配偶者からの悪意な遺棄。(3)配偶者の生死が三年以上不明。(4)配偶者が強度の精神病にかかり、回復の見込みがない。(5)その他婚姻を

継続し難い、重大な事由があるときなどである。

(四)親子関係 親子関係の場合でも、また同じことがいえる。親は出生した子供を、養育し扶養しなければならないのは当然である。学齢に達すれば就学させ、学問や常識を学ばせ、自立を促して社会に出すのも親の責任である。それまでの期間、子供に愛情をそそいで保育し、風俗や習慣になじませ、ことばを教え、礼儀作法を身につけさせ、一人前の人間に育てなければならないのも、親の義務である。親が子供を産んで育てることを放棄すれば、子供は成育できないし、自立ものぞめなくなる。このため社会は親に法律上、扶養や就学の義務を負わせる一方、社会慣習や人倫道德上の責任意識を促し、親の勝手な行動を制限している。親が子供に対する義務を怠れば、社会から非難されるのは当然のことである。

(五)子供の社会 こうした制約はまた、子供の世界についてみても同じである。子供も子供の社会に住んでいる以上、子供の社会の約束に従うことが求められる。子供の生活はおもに、友だちとの遊びが中心であるが、遊びの世界にもきまりがある。野球には野球のルールがあり、ドッチボール遊びには、ドッチボール遊びの約束がある。遊びの約束が守られなければ、遊びが楽しくなくなるだけでなく、遊び自体成り立たなくなる。ブランコやすべり台遊びにも、遊ぶ順番にきまりがあり、順番を無視して自分勝手に振舞えば、ブランコやすべり台遊びの楽しさは失なわれる。おにごっこやかくれんぼ遊びにも、一定の約束があって、約束を守ることで遊びも成り立ち、遊びの楽しさもます。このように子供の遊びのルールは、遊びの楽しさを保障するとともに、友だち同士の間関係維持の安全弁ともなっている。野球では自分の相手が打ったヒットは、どこまでもヒットとして認めなくてはならないし、ルールに合致した得点は、どんなにくやしくても相手チームの得点になる。ジャンケンの勝ち負けははっきりしていて、年齢差や男女両性の違い、あるいは力の強い弱いに関係がない。かけっこや角力の勝ち負けにしても、力づくで左右されない、子供社会の約束ごとがある。

約束ごとやルールを無視すれば、友だちの仲間入りはできないし、友だちから非難されたり、笑われたりするの大人の社会と同じである。

(4) **学校の統制** 学校に行けば、学校にもまた学校の規則があって、子供の生活や行動を直接間接に拘束制約する。学校は教師を仲立ちとした、子供同士の小社会であって、そこにも約束やきまりがなければ、学校や学級生活の維持は困難になる。このため学校では、学校や学級の目標やきまりをつくり、子供を自主自発的にその方向への参加を促し、従わないものには、罰則や規程を設けて、一定の約束に合致するよう拘束する。多くの学校において、校則や学則などの規程をつくり、入学や卒業、学科や試験、進級や停学の規則のほか、制服や異装、頭髮や髪型、行為や行動について、細かく規定しているのもこのためである。その一例を中学校（私立）の場合について、「生徒心得」によってみると、登校下校、校内や校外生活についてなど、つぎのように具体的な定めをしている。いずれも学校生活維持を目的とした、子供に対する外部からの統制である。

(1) **登校下校** (1)朝礼は8時25分、始業は8時35分。(冬時間には朝礼8時40分、始業8時50分) (2)終業後はなるべく早く帰宅すること。(3)下校時間は、午後4時30分、但し土曜日は午後3時とする。(4)下校時間以後やむを得ず居残る場合は担任又は顧問の承認を得ること、この場合午後6時以後にならないこと。(冬時間5時30分) (5)登校下校の途中はみだりに他所へ立ち寄らぬこと。(6)やむを得ず立ち寄る場合は自宅への連絡と、クラス担任の許可を必要とする。(7)登下校に際しては原則として、一定の通学路と交通機関を利用し、タクシーなど利用してはならない。(8)路上または車内では言動をつつしみ本学園生徒としての品位を失わぬように十分注意すること。(9)休日に登校する場合も制服を着用すること。(10)登校後、下校までは許可なく校外へ出ないこと。(2) **校内生活** (11)朝礼には必ず出席し祈りは真心をこめて敬けんに唱えること。(12)先生や上級生など目上の人に対しては礼儀正しく尊敬をもって、小学校児童や幼稚園児に対してはやさしく、いたわりをもって接すること。(13)校内では常に丁寧な言葉を話すこと。(14)廊下、階段、洗面所で、必要なことは低声で話すこと。(15)校舎、校庭、校具は大切に扱い、万一破損した場合は係りの先生又はクラス担任に申し出ること。建具建物又は備品などを破損したり紛失したりした場合は弁償させることがある。(16)余分な小遣いや学生にふさわしくない図書、物品を学校に持ってこないこと。(17)履物は必ず上

下区別すること。(18)何かの催しを計画するときは必ずクラス担任を通じ校長の許可を願うこと。(19)諸教室を使用する場合はあらかじめクラス担任を通じて校長の許可を願うこと。(20)校舎内外に諸掲示をする場合は校長の許可を願うこと。(21)電話は直接生徒に取りつがな。い。(22)休日に学校を使用する場合は前もって許可を願うこと。(23)欠席、遅刻、早退、体育の見学の場合はその度毎に保護者から届け出ること。(24)始業の合図と共に直ちに静粛にし先生が教室に入られる時は正しい姿勢で起立すること、また授業の始め終りの礼は正しくすること。(25)授業は正しい姿勢でまじめに受けること。(26)試験の際不正な行為は絶対にしないこと。(27)身なりは慎しみ深く清潔にし虚飾や技巧をさけること。(28)校舎内の清潔整頓に注意し、適当に換気すること。(29)掃除当番は責任をもって果し掃除後に使用した箇所は戸締り、整頓を忘れないこと。(30)日直は各時間毎に黒板を整備すること。(3)校外
(31)学園生徒として公けの行動をする際には、校外に於ても制服を着用すること。(32)私服を着用する場合には、常に学生であることをわきまえ、華美にならぬ様注意すること。

(七)職場の規則 会社や銀行、病院や役所にも社則や就業規則、あるいは法律上の約定があって、その契約や約束の範囲内で、雇傭関係が成り立っている。雇傭者はいつでも、被雇傭者の解雇の自由をもつ一方、被雇傭者も法律上団結権の自由や、その他の権利が保障されている。しかし被雇傭者は、完全に勤務上の自由をもっているわけではない。社則や諸規則、あるいは法定上の約束に拘束されている。これに従わないか無視すれば、法定または約束上の制約をうける。これも会社や企業などの組織が、企業体制維持のなめになす維持機能の一つといえる。

(八)社会統制と主体 以上このようにみてくると、ひとは家族や夫婦、親や子供、あるいは会社員や銀行員、医療者や公務員、教員や生徒など、その他ひとであるかぎり、誰でもが社会の統制拘束をまぬがれえない、宿命的一面をもっていることがわかる。事実、ひとは社会のなかで生きつづけるかぎり、社会の支配、制約を離れるわけにはいかない。結婚して家庭をつくり、家族を構成すれば、家族制度上の約束に従わなければならない。夫婦関係にしても、道義上あるいは習俗習慣上の慣行のほか、法律上の制約がある。親子の場合でも、親は子供の扶養をはじめ、教育や躾け、あるい

は保護監督など、成育上の責任を負っている。このように家族は家族として、夫婦は夫婦として、親子兄弟姉妹は親子兄弟姉妹として、誰でもが負わなければならない、責任と義務がある。しかしとはいっても、それにむきあうひと（主体）は、単に約束や規則に盲従したり、追従しているわけではない。家族同士の義務も、夫婦間の信頼や愛情も、子供に対する愛育や教育の仕事にしても、自らの自然の意志にしたがって、行なっている場合が多い。そのうえひとはこのほか、以上このような拘束や束縛をはなれたければ、未婚でいて家庭をつくらない自由もある。子供の養育が負担であれば、子供を産まない選択もできる。夫婦間の約束に従いたくなければ、通常の結婚をしないという方法もある。既婚の場合でも、結婚を継続する意志がなくなれば、協議あるいは裁判によって、離婚することも可能である。結婚することも離婚することも、子供を産むことも産まないことも、自分（主体）の意志によって選択できる。自分の意志で選択可能であるという意味で、そこにはまぎれもなく主体としての自分がいる。

子供の場合にも、上述すでにみてきたように、子供も子供社会の一員であるという意味で、子供社会の約束はまぬがれられない。子供の社会は、いうまでもなく、子供同士の遊びを中心につくられる小社会である。かれらはこうして、日常身近かな遊びの生活を通して、かれらの遊び社会の拘束とむきあっている。しかしこの場合でも、子供の遊び社会の約束が、かれらを絶対至上に拘束するわけではない。遊びのルールや約束ごとに従いたくなければ、遊びに加わらない自由がある。子供同士の遊びをはなれて、ひとり遊びを楽しむことも考えられる。同じ遊びのルールにしても、子供の遊びにより適合するように、改めたり工夫したりする余地もある。遊びのルールや約束ごとが、子供を拘束規制することは確かであるが、遊びに加わらない自由も、ルール自体を改変工夫する方法もあるという意味で、子供自身が制約や拘束の上位に間違いなく位置している。

学校のきまりや校則、あるいは学則などについても同じことがいえる。

校則や学則は、好むと好まざるとにかかわらず、生徒や学生を拘束する。制服の定めがあれば、私服の着用は許されない。男子の長髪や女生徒のカーンが禁止されておれば、個人の趣向と関係なく、生徒や学生の自由は制限される。まして学則に違反して不正行為をしたり、非行をはたらけば、本人の意志と別に、学則や校則にてらして処罰される。出校停止や留年、除籍や退学を命ぜられることもある。しかし学校の規則がどれほど厳格で、罰則が厳しくとも、その拘束をうけるのは在学中だけのことである。校則や学則、生徒心得の約束が厳格であるからといって、在学在校していないものにまで効力はおよばない。在学している場合でも、その拘束をはなれたければ、退学も退校も自由にできる。入学して学校に行く自由があるように、退学して学校に行かないという自由もある。入学したのも自分であり、退学するのも自分である。入学することも退学することも、自分自身の意志できめられるという点で、この場合も自分（主体）が、校則や学則など諸規則の上位にいる。

会社や銀行、病院や学校、工場や商店あるいはその他の職場でも、このことは同じようにいえる。会社や銀行には、たしかに社訓や社則がある。身分や報酬、あるいは相互の雇傭関係は、雇傭規定によってきめられている。。法律や契約は雇傭者が代償を支払う代わりに、被雇傭者に勤労を提供することを義務づけている。勤務時間や仕事の分担、就業上の約束や取りきめもある。しかしこの場合も、そのような拘束や制約に服したくなければ、退職も辞職も自由である。退職あるいは辞職をすれば、どのような厳しい社則や拘束も、職場外にまで支配力はおよばない。退職あるいは辞職をしなくても、契約や約束に矛盾や不合理があれば、それを改変したり廃止する工夫の余地もある。規則を定めたのもひと（主体）であり、これを履行したり、改変や廃止するのもまたひとである。制定あるいは改正や廃止、退職や辞職もともに可能であるという点で、ひとは拘束制約の上位にいる。

(4) 慣習(禁忌)や流行と主体

(一)慣習(禁忌) ひとがむきあう、社会のなかの事柄や生活は、すでにみてきた家庭や家族、学校や職場などの場合にかぎらない。ひとはこのほか生活のなかに生きている、例えば慣習や習俗、風潮や流行などともむきあっている。慣習や習俗は、長い生活の伝統のなかで、培われ伝えられてきたものだけに、好むと好まざるとにかかわらず、ひとをその枠内に取りこむ拘束力をもっている。冠婚葬祭にともなう慣行や習慣はもとより、日常茶飯のささやかなしきたりに至るまで、細かくひとの行為や行動を拘束する。それに従わなければ、慣習慣行を無視したとして非難され、世間の笑いものともなり、恥をかくことになる。その一例を、例えば冠婚葬祭の場合について、「冠婚葬祭べからず集」(「家庭宝鑑」所載)から、一部抜粋してみても、つぎのようにかぎりなく多い。

(1)一般的タブー (1)集ってほかの話をするな(2)平服でとあったら、礼服で行くな(3)忌みことばを使うな(4)訪問先では敷居をふむな(5)座布団は裏返しにするな(6)時間におくれるな(7)通信はがきの「御」など消し忘れるな(8)六曜にあまりこだわるな(9)ことわざを誤って使うな(10)お金と物だけをお返しと考えるな(11)勝ち負けのある祝い交換をするな(12)水引をまちがえるな(13)祝儀袋の中身をまちがえるな(14)紙幣の枚数は形式にこだわるな(15)古い紙幣をいれて贈るな(16)祝儀袋をむき出しで持っていくな (2)冠に関するタブー (1)厄年にあまりとらわれるな(2)還暦をはでに祝うな(3)お宮参りの日にこだわるな(4)出産のお祝に男性は行くな(5)出産祝には急いで行くな (3)婚に関するタブー (1)新郎新婦は私語をするな(2)新郎新婦は途中で旅行に出発するな(3)新郎新婦の不在中にスピーチを頼むな(4)食事中にスピーチをするな(5)悪趣味なスピーチをするな(6)政治宗教の話をするな(7)ケーキ入刀までは退席するな(8)披露宴の入口で譲り合いをするな(9)新婚旅行を駅で大勢して見送るな(10)花嫁よりも引き立つな(11)欠席理由に縁起の悪いことを言うな (4)葬に関するタブー (1)医師への支払いが遅れるな(2)僧侶へのお礼は遅れるな(3)会計を遺族や親族はやるな(4)喪主は客を見送るな(5)形見の品は包装するな(6)香典返しは忌明け前にするな(7)年賀欠礼の通知は十二月上旬をすぎるな(8)あまり早く香典をもって行くな(9)勝手に何式かを判断するな(10)会葬の時死の模様をたずねるな(11)線香やろうそくの炎は吹き消すな(12)拍手は音をたてるな(13)焼香の回数にこだわるな(14)精進落しで長居、

深酒をするな (4)祭に関するタブー (1)元日に掃除をするな(2)目上の人の子供にお年玉をやるな(3)鏡餅は刃物で切るな(4)ひな人形は五日まで出しておくな(5)中元や歳暮はおくれるな(6)大晦日に飾りつけをするな

このようなタブーは上例のような、冠婚葬祭などの場合のほか、場所や方角、あるいは行事の日どりなどの俗信や迷信、縁起をかつぐところから生まれたものなどと数多い。いずれもこれらの禁忌は、本来は社会秩序を守り、急激な社会変化を防ぐ、安全機能の役割をしていた。しかし今日では知識がすすみ、俗信や迷信を盲信せず、常識にあわないような禁忌には、盲従しないという傾向が強くなってきた。時代の流れは、縁起や俗信による判断よりも、自分自身の意志決定を要求しはじめてきているからである。高見沢たか子「迷信」(「朝日新聞」所載)が、「タブー破ってみては」と、つぎのように奨めているのも、同じ趣旨によっている。そこにも俗信や迷信、慣習や慣行にこだわらない、意志決定の主体者としてのひとがいる。

つい最近まで病気見舞いに鉢植えの花を贈るものではないとされていたのに、いつのまにか鉢植えも平気で使われるようになりました。「根つく」「寝つく」などという連想にこだわるよりも、鉢植えの楽しさ、簡便さのほうをとる人が増えたということでしょう。それでもまだまだ、縁起や迷信をかつぐのが好きな人がいます。ある娘さんが結婚祝いに四個セットのワイングラスを贈られたところ、母親から不吉な数だといわれて言い争いになりました。「九」と「四」は、なににつけ忌み嫌われますが、欧米では食器を四個セットで売るのは珍しくなく、四個単位のパッケージも少なくありません。「四は不吉だと自分が思い込むのは勝手よ、でもそんなこと気にしない人にまでいうのはおせっかいよ」。娘さんのこの意見にわたしも賛成。本人は好意のつもりでも、他人の生活を乱すことになりかねません。親切を通り越しておせっかいのうちにはいます。だれでも身の安全を願う気持ちはあります。縁起をかついだり、お守り札をさげたりすることを一概に否定するつもりはありませんが、あくまで生活のいろどりとして、趣味あるいはお楽しみの範囲にとどめたいと、わたしは思います。

おつきあいの上では相手のあること、自分が気にしていなくても相手が気にするようなら、常識程度のタブーは避けるにこしたことはありません。あるいは積極的にこちらの意向を説明して、お互いにタブーを乗り越えるのも新しいおつきあいではないでしょうか。「縁起かつぐ?」「いえ、気にしないわ」「じゃ、お祝

いにいいナイフのセットあげる」。時代の流れは縁起や迷信による決断よりも、本人自身の素早い意思の決定を要求しているように思われます。

(二)風潮や流行　ひとはまた前述のように、社会の風潮や流行に、しばしば大きく支配拘束されることがある。そのことは例えば、女性の服装やアクセサリー、化粧の仕方や髪型の流行についてみてもわかる。女性の服飾のうち、ミニスカートについてふりかえってみると、ミニスカートの流行は昭和40年頃、イギリスで考案されたものが、パリーに紹介されたことが発端となった。わが国でも翌41年以降流行の仲間入りをし、女性は栄養不良になってまで、それに似合う美しい体づくりにはげむ風潮すら生んだ。鷹司 綸子「服飾文化史」によって、その模様を記すとつぎのようになる。

39年アンドレ・クレージュは「現代の女性は生花ではない」といって新しいパンタロンを発表、さらに翌年イギリスのマリイ・クワントが発表した女性のミニスカートをいち早くパリに紹介、ここにミニスカートの大流行となったが、41年日本もミニ旋風の仲間入りをした。これは若さの象徴であり、若者のモードというより、モードの若年化をはかったものであった。ミニスカートの流行はパンティーストッキング（パンティーホーズ）の発達となる。ジプシールック、シャッフルック、ヒッピーモード、ベトナムルックなど様々な若者モードが出された。人々は若くみえて、日本人の体型に思いのほか似合ったため、初めは抵抗をみせていた人々まで段々とスカートの裾をまつり上げていった。アクセサリーに縁遠かった日本人が様々のものをつけるようになったのも、ニューAラインと呼ばれるシンプルなミニワンピースの副産物である。むき出しのほっそりしたシルエットは、若い女性たちにプロポーションの重要さを痛感させ、栄養不良になってまでの涙ぐましい摂食で「美しい体」づくりに励むことになった。

化粧の仕方にしても、女性は時代の風潮や流行に敏感に反応する。化粧の仕方、つまり顔をよそおう方法は、皮膚の手入れにはじまって、白粉や頬紅をぬること、目の魅力出すためにする、アイシャドウやつけまつ毛、唇の魅力をます口紅、まゆの美しさを出すための眉づくりなどがある。このほか美容には手の指の爪を染めるマニキュア、足の爪にぬるペディキュア、毛髪を染めたり、肌を太陽の光に灼いて、小麦色の健康美を出すなどいろ

いろある。このほか化粧品の香りや、香水によるおしゃれ、服飾品の流行などをふくめるとかぎりがない。髪型についても、同じように時代の風潮や流行を反映して、一つの型をつくってきた。春山行夫著「おしゃれ文化史」によって、髪型の流行史について、戦後昭和21（1946）年から同33年（1958）までを概観するとつぎのようになる。

(1)昭和21年（1946）新日本髪（新生日本髪、文化桃割れ、民主丸髷）の考案。戦前の内巻（ワンロール）とページ・ボーイが復活。前者は「リヴァースロール」(reverse roll)と呼ばれていたスタイルで、肩までの長さ。後者は1930年代に登場。グreta・ガルボの髪型として世界的にひろまり、1960年代に青年層のはやりになった。(2)昭和23（1948）この頃、外巻（かたいロール巻）とフェザーカールが流行。ページ・ボーイ式フェザースタイルがあらわれた。(3)昭和25(1950)コールド・パーマがはじまる(4)昭和27（1952）ポニー・テールとプードル・スタイル。(5)昭和28（1952）昭和27年月から、NHKで放送が開始された連続ラジオドラマ「君の名は」が、翌年松竹で岸恵子、佐田啓二のコンビで映画化され、「真知子巻」が全国的に大流行となった。これは髪型でなく、ニットのストールを肩から頭にかけて巻いたスタイルだったが、映画のスタイルの影響がこれほど広く行きわたったことは、前例がなかった。(6)昭和29（1954）オードリー・ヘプバーンの「ローマの休日」が上映され、ヘプバーン・カットが流行。これはイタリアン・ボーイと呼ばれていたスタイルだった。この頃、ボーイッシュ・カットがさかんになり、ショート・ヘアのピークといわれた。(7)昭和31（1956）イタリア映画の影響でボンパドールが流行。(8)昭和33（1958）春に「悲しみよ今日は」が上映され、主演のジーン・セバーグのセシール・カットが一時的に流行。その他、昭和年前後が、スクリーン・モードのピークだった。

(三)流行と主体 このように女性の服飾や化粧の仕方、あるいは髪型の風俗や流行をみても、その時代特有の風潮が反映していることがわかる。事実、今日の女性で明治期や大正期、戦前や戦中と同じ服飾化粧、あるいは髪型をしているものはいない。明治期には同期における、大正期や戦前、戦中の場合でも、その時代特有の傾向や風潮が、流行の主流を占めていたはずである。しかしそうはいっても、万人が万人同じ服飾を身につけ、同じ化粧をし、同じ髪型をしていたわけではない。今日においても、洋装や洋髪が時代の主流であるといっても、和服を身につけ日本風の化粧や髪型を好む

女性も多い。マニキュアやペディキュア、あるいはアイシャドウや眉づくりが流行しているとはいっても、すべてのひとがことごとくそうしているわけではない。同じ洋装や洋髪でも、服の色合いや髪型の好みは一樣ではない。髪型だけにかぎってみても、今日の若い女性の大部分は洋髪で、基本はロングやセミロング、あるいはショートではあっても、変化のつけ方に自己主張があり、個人の好みを反映した個性化が目立っている。星井周作（ロングの場合）、平野哲（セミロングの場合）、小野一樹（ショートの場合）は、「旅先でのヘア・アレンジ」（『週刊女性』所載）の仕方を、「ヘアスタイルにチャレンジ心を発揮して、新しい自分の顔を見つけない」と、つぎのような個性的な髪型の例を紹介している。そこには今日の一般的な髪型の流行のなかにも、なお自己（主体）主張や、個性化の傾向がみられる。そこにも一般的流行や、風潮におし流されない、自分という主体がいることがわかる。

(1)ロング (1)野性的なイメージの中にも女らしさを漂わせるロングのカーリーはスカートにもパンツにもピッタリ。(2)フロントを斜めに分け、トップサイドでとめる。カジュアルな服に似合う若々しい雰囲気スタイル。(3)フロントとサイドを多めにとり、ゴールデンポイントで結ぶ。フェースラインのフリンジで可憐さを。(4)ロングレイヤーはOLから学生まで幅広い人気。手入れも簡単で、アレンジしやすいスタイル。(5)フェースラインにそってブロック分けした髪を、片サイドから順にカラーゴムで結んでいく。 (2)セミロング (1)フロントからサイドを大きくスイングさせ、シャープ感のあるボブをソフトムードに変化させたヘア。(2)さわやかさを強調したいなら、フェースラインにそって髪をねじりこみ、スッキリとしたスタイルに。(3)ポンパドール風に仕上げたフェミニンなヘア。フロントはゆとりをもたせて束ね、ボリュームを出す。(4)神秘的なムードをかもしだすワンレングスのボブスタイル。ストレートヘアの美しさがポイント。(5)細めのカーラーで巻き、毛先を外に向けて軽くはねるようにブラッシング。クラシックなイメージに。(6)前髪をあげて顔を明るく印象に。口と目の延長線上で髪を束ね、太めのリボンをつけて愛らしく。 (3)ショート (1)フロントは長め、サイドはレイヤーにしたダイアナカット。軽くスイングするサイドヘアがポイント。(2)片サイドの髪をゴールデンポイントへ向けてツイストさせる。左右のバランスをくずして躍動感を。(3)毛先にディップをつけ、指で散らすように仕上げる。大胆に変身したい人向けのワイルド感覚のヘア。(4)シンプルなベリーショートは服装に合わ

せて、エレガントにもボーイッシュにもアレンジが自由自在。(5)ディップを髪の根元につけコームでセット。思いきりアダルトな気分が味わえるマニッシュなヘア。(6)ロンドンパンクっぽく毛先をスパイキータッチに仕上げる。ディップをつけてドライヤーをあてるだけ。

このような髪型の個性化は、とりわけ今世紀のはじめ頃以降、いつの時代にもみられた。その考え方の基本は、髪の形は時代の流行にあわせて結うべきものではなく、ひとの顔（個性）にあわせて結うのが本当であるというものであった。この結果今日では、ヘアドレッサーも当人も、本人の好みを重くみるとともに、顔のタイプに似合う髪型を選んで結うようになった。今日においても、なお髪型の一般的流行はあるが、往昔のような身分や階層、職業などによる定型的髪型はみられなくなった。そこにも一般的な社会の風潮を反映しながら、なお流行一般に埋没しきらない、自分の好みにしたがう個性がみられる。「日本家庭大百科事彙」所載「髪型」から、昭和初年期における、髪型個性化の主張をみるとつぎのようになる。

今日結われている「束髪」と総称されている種類は、一時は底髪、七三、オールバック等の型に分類されたが、最近それ等の型は寧ろ古風なものとなって、各人おのおのが自ら似合う型を工夫するので、著しく個性が現われるようになった……風俗史に現われた往時の髪形が、幾多の変遷を経たように、婦人の髪形は時代によって様々に推移する。……現代に於ては大正の末期から洋装が著しく増加したため、髪形も変化し「洋髪」の名が生れるに至ったが、昭和になってもこの傾向は益々濃厚になって来た。……一時の如く七三とか髷なし、耳かくしなど一つの型を流行の中心とせず、各々の好みに結うようになった。つまり姿に於て洋装もあれば和服もあり、同じ和服でも柄合から着付まで非常に洋風化したのと、純日本風とがあって、着物がすでにつの中心にまとまっていなから、髪もまたそれに準じて来るのは当然であろう。現代婦人は年中同じ形には結わない。即ち、純日本式にしたい場合は日本髪、束髪でも儀式に列するため紋付を着る時などは上品向き、同じ会合でも音楽会、夜会、茶の会などでは各々趣を異にする。平時でも着物の柄や着付などで髪もそれに応じた形にして、自分が表現したいと思う感じを助ける一端とする。なかには変化させない人もあるが、それは自分によく似合う形を選んだ結果、他に変わると個性が失われるからである。結髪師の方でもそれぞれ特長を持っているので結わせる方では自分に似合う形の上手な人を求

めたり、思い切って洋風にしたい時はそういう結髪師のもとへ、またおとなし向きにしたい場合はその目的の達せられる人のもとに行く。なかには外国の映画雑誌を持ちこんで、写真の通りの形にと注文する人もいる。突飛に形の変った髪に結っても、敢えて珍しがられる時代になったから、個性を発揮し、表現したい感じを十分に出すために、髪形はきわめて自由に選ばれるのである」(一部意識)

上掲の主張をみても明らかなように、そこには同じ髪型にしても、髪型の良否は流行一般というよりも、自分の顔を生かした、個性によってきまるといふ、個性強調の傾向がうかがえる。従来日本人の結髪の伝統が、年齢や身分、階層や職業によって、本人の顔立ちと関係なく、定型的に結われてきたことと比較すれば、これは大きな革命ですらあった。そこには社会の風潮や流行一般におし流されない、自分という個人がいる。これをまた流行のなかにおける、個人の位置の発見とみても同じことになる。

(5) 体験の個別化と一般化

(一) **体験の深化** ひととは以上このように、自分を環境の中心軸にしながら、周囲とのかかわりをもち、自分体験を深めていく。そのことはすでにみてきた、ひとと自然や季節との出会い、あるいは社会制度や事象、とりわけ家族や夫婦、親子や兄弟姉妹、学校や職場、このほか文化をふくむ社会慣習や習俗、社会風潮や流行など、そのどれ一つをとってみても、ことごとく、ひとの体験深化の契機となりうる事実にてらしてもわかる。

しかも体験深化の契機は、ことがらの大小や軽重、あるいは日常や異常のいずれかを問わない。生活の重要なできごとの場合においてはもちろん、日常ささやかなことがらのなかにもその機会はある。希望や失意、成功や挫折、得恋や悲恋、健康や病患、就職や失業、入学や失敗、生死や別離のなかにも、その動因はつねに内在している。朝から晩まで、昨日も今日も、生まれた瞬間から死ぬまで、いつでもどこでも、ひとの体験深化の機会はある。この点でみるかぎり、ささやかなことがらはすべて無意味で、希望

や成功や健康やだけが、意味があるということにはならない。日常茶飯の何気ないことがらのなかにも、失意や失敗、病患や死別などの非常な場合においても、ともに深く激しい、体験深化の契機は同じほどある。

この意味でいえば、子供の流す涙が、子供であるというだけの理由で意味がなく、大人の涙が大人であるというだけの理由で、重い意味をもつとはかぎらない。子供の一粒の涙が、海よりも底深い体験深化の契機を伴っていることがあり、大人のおよばない、真珠の一粒のような輝きを内包している場合もある。子供を出産した母親としての体験は、庶民も王后王妃も変わらないし、子供とかかわりあう母親の体験は、身分や社会的地位、貧富の差も無関係である。女性は子供を産むことによって親となり、子供を愛育する体験の深化を通して母となる。子供を産めば誰でも親にはなれるが、子供の愛育庇護の体験深化がなければ母とはなれない。この意味でみれば、子供を生まなくても、子供の愛育慈愛の体験深化があれば、親にはなれないが親以上の母になる。母とはいいいかえれば、子供を愛育保護して、その結果辿りつく、愛育体験の帰結ということになる。事実、Pestalozzi (1746-1827) は、子供(貧児)を慈育する過程によって、親以上の父母となり、Gandhi (1869-1948) は、民衆を愛することを通して、インドの大衆の父とも母ともなった。Sullivan (1869-1936) は、Helen Keller (1880-1968) を育てることによって、Helen の母となり、Hellen は盲人の援護愛育に献身することにおいて、全世界の障害者の偉大な母となった。そのことは Hellen についていえば、Hellen 著「わたしの生涯」(「The Story of my life」岩橋武夫訳) 所載、つぎの記述をみてもわかる。

見えない、聞こえない、言えない——このまれにみる人生の不幸から、今日の輝かしい奇跡を勝ち得たヘレン・ケラー女史その人！……ヘレン・ケラー女史は生涯を、心身障害者の幸福のために捧げ尽くしました。この事実、彼女が三重苦の中から立ち上がった以上に重要な意義があります。それについては、ただひとりの弟子ヘレンを余年の全生涯を惜しみなく捧げ尽した、アン・メイシー・サリバン先生の偉大な愛が、ヘレンの生命を貫いているからであります。恩師サリ

バン先生は、おのが弟子のためには、太陽である自分をどんなときにも夜空と化し、ヘレンというただ一つの尊い星の光をより輝かせたのであります。サリバン先生がなくなられたとき、ヘレンは堅く心に誓いました。「先生は自分のような者のために、その一生を捧げきって死んで行かれた。それこそ完全な奉仕の生涯である。残されたわたしこそ、その連続でなければならない」と。先生の霊前に花をたむけるのもけっこうですが、彼女は永遠に枯れない花をたむけ、消えることのない香をたくことが、より大きな供養であることに気がつきました。自分の生涯を供養し、捧げ尽くすこと、それが先生への最大のご恩返しとなることだと堅く決心しました。ヘレン・ケラー女史が今日まで、盲人や多くの心身障害者のため、いちずに捧げ尽くした理由があります。この真意を理解できない人は、ヘレン・ケラー女史をほんとうに知ったということにはならないでしょう。彼女の顔に常にたたえた微笑の中に深い刻みのあるものもまた、心うなづけることではありますまいか。

このような覚悟ではじめられた彼女の盲人援護運動は、ほんとに激しく力強いものでした。たとえば、昭和12年4月に日本へ来たとき、3か月間にわたり、ほとんど休養のいとまもなく活動し続けました。日本全国はもとより、朝鮮・満州まで足をのばし、全行程1万4千キロメートルにおよび、講演回数97回、19万7千人の人々にうったえ続けました。このほか世界の隅々まで旅を続け、盲人の福祉と教育向上の必要を、ていねいに熱心に説いてまわりました。この彼女の訪問によって、どれだけ心やからだに障害をもつ多くの不幸な人々が救われ、勇気を取り戻し、社会の中へ帰って行ったことでしょうか。……今は、ヘレン・ケラー女史もすでに85歳、アーカンリッジの家で静かな余生を送っています。彼女は最後まで、きっと、「あなたのランプの灯を今少し高く掲げてください。見えぬ人々の行くてを照すために——」と全世界の人々に呼びかけることでありましょう。

以上のことは、ひとの病患の場合についてもいえる。病患は健康を損なっているという意味で、一般に不幸せであるには違いない。しかし健常者が精神の健康を腐蝕し、病患者がかえって、真実の健常な精神を深めているという場合がある。病患であると健常であるとを問わず、ここで重要なのは、それ（環境条件）とひと（主体）がどうかかわり、何を体験するかということである。そのことは1歳のときに小児マヒとなり、いまでも身体不自由な画家、原田泰治の世界が、幼年期の病患が原点となって、噴泉している事実をみてもうなづける。その記録「わたしの信州」には、子供体験

の深化の契機について、つぎのように生々しく記されている。

幼い日の遠い記憶の中から、こつこつと掘り起こしてくる信州の自然と、そこに生きている人々の素朴な生活——。そうしたぼくのイラストレーションの世界は、いまになって考えると、足が不自由だったこと、そのことに負うところが非常に大きいと思う。ぼくの世界を形成した原点、と言ってもいいでしょう。1歳のとき、小児マヒになって、いまも両足が悪いぼくは、物を見て取材してかくということはほとんどなく、ぼくの脳裏に焼き付いている記憶の中のものを、克明に再現していくのです。手にアカギレを切らしている母の姿だとか、季節になると赤紫色に熟れて割れてくるイチジクとか、法玄原の草の芽生え方だとか……。

現在、ぼくは長野県、諏訪市に住んでいますが、4歳から中学1年の1学期まで、飯田市から4キロ離れた伊賀良村という山村にいました。戦争中に疎開して、そこで少年時代をずっと過ごしたわけです。なにしろものすごいワンパクで、おまけに口が非常に達者な子だったらしいけれど、足が悪いと、やはり普通の子供たちと同じようにいかないのは当然のことでした。だが、ワンパク坊主の本領というか、根が陽気なぼくは、メソメソするかわりに、そこに生えている草だとか、小鳥だとか、小さな生きものだとか、とにかく自分がいるその範囲内で、遊ぶものを見つけたものです。いやでもそうして遊ぶしかなかった。つまり、限定された中での自分の世界を見出す。そういうことが、いまのぼくのイラストレーションの基本になっていると思いますし、同時に、人間としてのぼくの原点も、あの伊賀良村だと思うのです。

体が悪いながらも、なんでももっとみなければだめだ、というぼくなり自覚があって、負けん気でいちおう何にでもぶつかっていきましたが、反面、そういう遊びの中で、「おいていかれるのではないか。待たされるのではないか」という思いがいつもありました。みんなに自分がどうついていけばいいかを、いつも離れて見ていた幼いぼくの視線というものがあったのです。しかし、すべてが電車ゴッコのようにはいかないので、おいていかれた場所で待ちながら、仕方なく物を見ていることが多く、それが観察力となって記憶に刻みつけられていったのです。……小学年生ぐらいの子が、そこにじっとして待っていなければならない孤独感というのは、非常につらかった。それだけに、そのときがいちばん物を見られたように思います。その少年時代の観察力と記憶力が、現在のぼくの大切な宝です。……ぼくの場合は、幼児性の部分、子供の目で見たままの思い出がぐっと凝縮されていて、伊賀良村のものは、もう何千カットとも知れないくらい、克明に記憶しているのです。……そんな自然現象にしる情景にしる、もうぼくにとっては思い出とかではなく、ぼくの幼児性は、描くという作業の中で、伊賀良の亀の甲のひび割れをはがしているのです。1枚ずつ、丹念に、注意深くはがし

ながら、すごい喜びを感じているのです。ぼくにとって信州とは、それは伊賀良村そのものであり、本当の意味でのふるさと伊賀良村だと言えましょう。とすれば、ぼくの絵のふるさと、あの伊賀良村——。ぼくの足がこれだけになれたのも、手術のおかげでもなんでもない、伊賀良村の土と太陽のおかげです。

このようにみてくると、生活のなかにおけるすべてのことから、例えば入学や卒業、合格や不合格、就職や失職、恋愛や失恋、結婚や離婚、健康や病患、生別や死別、その他万般のどれ一つとってみても、ことごとく自分体験深化の動因となることがわかる、事実、恋愛が情落の一步となることがあり、失恋が絶望からの出発点となる場合も。結婚がつねに、幸福への契機となり、離婚がすべて不幸の出発点となるとはかぎらない。結婚が恋愛の墓場ともなり、離婚がもう一つの人生の旅立ちとなる場合もある。入学が将来の栄進の保障とはならないように、学校に行かないことが、進路の障壁となるとはかぎらない。たしかに学校は、ひとびとに知識や技術、その他のことがらを伝える教育機関として、今日多くのひとがその恵沢に浴している。学校はその点で、学校がまだひとびとのものでなかった時代にくらべ、今日的重要な役割を果していることは確かである。しかしどれだけ学校の施設や設備が整い、教育の便宜が普及しても、本人に向学心がなければ学習の自分体験は深まならない。学校に行かなくても、自分に向学心があり、学ぶ意志があれば、学習の機会はどこにでもある。単に学校という機関によらなくても、生活そのものを学校にすることもできる。学校という教育機関をふくめ、学校外での生活全体が、ことごとく自分（体験）深化の世界になる。映画館や劇場、展覧会場や博物館、その他万般の生活事象までが、自分深化の機会に変わる。そのことは例えば、佐藤忠男「映画館が学校だった」という、つぎの引用をみてもうなづける。

私は、あまり学校へ行かずにモノ書きになったので、ずいぶん苦勞して独学したのでしょう、と言われることが多い。しかし、もし学校で教えているようなことをひとりで勉強するのを独学というのなら、私は独学なんかしていないし、勉

強の苦勞なんてものも全くしていない。私の学んだものはぜんぜん別のことだ。今日の学校教育の不幸は、教育の問題がすべて学校の問題になってしまっているところにあると思う。学校で教えられることなどタカが知れているのである。人間はもともと、学校以外のところで学ぶことのほうが圧倒的に多いのだ。早い話、恋愛の理想とか、恋愛の仕方、などということは学校では教えない。そのかわりに数学の公式やなんかを憶えさせる。私にはなにはともあれ、恋愛の理想のほうが、数学の公式より大切だと思えた。そして、それを教えてくれるのは学校でも家庭でもなくて映画や小説なのだった。……だいたい学校というところは、さまざまな知識や技能のうち、点数で計れる部分を野放図なまでに偏重し、点数で計ることのできない部分はどしどし切り捨ててゆくという特性を持っている。とくに日本はその偏りがはなはだしいと思う。英語や数学が偏重されるのはそのためであり、国語で作文やとくに話し方が軽視されるのもそのためだと私は睨んでいる。文章を味わう感受性といったものも、本来、点数では計れない種類の能力に属しているが、国語教師たちはそれを強引に点数で計ろうとくわだてて、ひとつの文章から感じられる気持をいくつかのパターンに分け、そのどれかに丸をつけよ、といった試験方法を考え出したりする。能力は点数で計られねばならぬという妄執の下に、人間の感受性まで統制しようという暴挙である。

私が映画から学んだ最大のことのひとつは、人間、恋をしなければ生れてきた甲斐がない、ということであった。この世でいちばん素晴らしいことは恋だ、と、映画が繰り返し繰り返し私に教えた。私はまったく素直にその教えを受け容れた。学校で優等生になろうと思ったことはいちどもないが、この映画の教えにはひどく素直だった。……それはまことに辛い苦しい日々であり、映画館で悲恋メロドラマでも見ようものなら、どんな通俗的な作品であっても、身につまされて泣けて泣けてしかたがないという歳月であったが、映画の信者である私にはそれは崇高なる試練のようにも思えたのだった。

映画は人生や社会について語っている。そこでは作者はなにか問いを出している。ただし、その問いは作者にもはっきりとは説明できないものであることが多い。答もあるにしても暫定的なものである。映画を見るとき、われわれは、作者の問いかけがなんであるかを考える。じつは作者は、あまり深くはものを考えず、これまでのきまりきった物語の型に沿って問題を出しているのかもしれない。たいていはそうであるし、個性的で思索的な作者のばあいも、その問題の出し方の根は知らず知らずに既成の物語の型に沿っているばあいが多い。そこでわれわれは、長い歴史をつうじて人間がつくりあげてきた人生や社会についてのあるばくぜんとした問いに接するのである。その問いをいくらかでもはっきりと自覚できる言葉に置き直す作業が批評である。私は14、15歳のころから、映画の内容や表現について考えるようになった。10代の終わりからは映画批評家として身を立てる

ことをばくぜんと意識しはじめた。批評家になろうと思いながら映画を見たということは、映画がばくぜんとしたかたちで問うているものを手掛りにして自分で問題をつくり直し、こうして半ば自分のつくった問題によって未知の答を探求するという愉しみにひたることである。……映画館が私の学校だったというのは、負け惜しみでないのはもちろん、自慢でさえもない。

このようにひとはつねに環境の中心にいて、自分（主体）とのかかわりのなかで、まわりの事象を体験している。一冊の書物が万巻の書物に優ることがあり、一行の記述が人生の転機となる場合もある。それとかかわるひと（主体）がそこにおれば、一冊の書物あるいは一行の記述が、万巻の書物以上の体験深化の機会となる証拠である。この意味でいえば、子供の体験が、つねに大人におよばないなどということにはならない。大人の目は確かで、子供の見る目は不確かであるとはかぎらない。子供のものの見方や感じ方は浅く、大人はつねに優っているなどと、きめてかかるわけにはいかない。大人の感情はつねに豊穡で、子供は未熟、貧弱であるということにはならない。子供はもともと子供の本性（自然）として、周囲の事象や事物を見たり、感じたり、考えたり、認識するだけの十分な素質をもっている。そのことは例えば、小岩井由紀子（小学四年児童）「私の手」など、つぎの児童詩の例をみてもわかる。そこには繊細多感な子供心を中心軸として、周囲の事物を、体験深化の契機としている子供がいる。

(1)私の手 私の手／これまでどんなことをした／一生けんめいノートに文字を書きました／一生けんめいそうじゃ給食の用意をしました／一生けんめい友だちの困っていることを助けようと思いました／ある時はひとを思いきりたたきました／あるときはかわいい動物をなでました／ある時はどろどろの土を掘ってお遊びしました／こんな手、私の大切な手／私はこの手で／私の未来をひらく (2)ブラインド ブラインドのすき間から／スーッと光がさしこんだ／花の芽が出たみたい／スポットライトが光ったみたいに／ブラインドのすき間から／スーッと光がさしこんだ (3)本 図書室の本が／横にたてにとならんでいる／時々仲間はずれになった本が／一人ぽっちで泣いている／一人仲間が借りられていくと／さみしそうにコトンとなおれる／仲間がかえってくる時まで／コトンとたおれたまんまです

(二)個性化 このように体験深化の契機は、大人であると子供であることを問わず、ひとが主体的にかかわるかぎり、生活のいたるところにある。名もない花を見て天然の美妙を知り、「折れたまま咲いてみせたる百合の花」(北村透谷)に触れ、絶望挫折からの出発点とすることもできる。子供の清らかな目をみて、自分の醜さを恥じ、高いものへの憧憬を強めることもできる。冷淡な教師やひとに出会って、かえって親切の必要を学ぶことも可能である。不公平や不正な仕打ちを体験して、不公平や不正を憎み、公平や公正への心を育てることもできる。「ひとのふり(行動)をみて、我がふり(振舞い)をなおす」こともある。すぐれた芸術作品を見て美性(芸術性)をかきたて、音楽や映画や演劇を観賞して、心の豊かさを深めることももちろんできる。文学や思想、学問や宗教に触発されて、自らの人間性を深め、生の体験深化に役立てることもある。

ひとはこうして生まれてから死ぬまで、時々刻々、日常ふだんに、いつでもどこでも、環境世界と出会うなかで、自分体験を深め、いよいよますます自分を個性化していく。この意味でいえば、自分体験の深化は、そのまま個性化(自分化)への過程であり、自分化(個性化)への過程は、自分体験の深化を前提にしているということになる。ひとが長い成長の過程のなかで、ものの考え方や感じ方、行動の仕方や生き方に個性(個人性)の別が生まれるのは、以上このような自分体験の個別深化の結果であり、個人性あるいは個性の特質が形成される、教育の秘密もまたここにある。この点でみるかぎり、ひとの個人性(個性)は、自分体験の深化を前提とし、個人性の深化は、また環境とかかわる主体に依存しているということになる。そこには確かにまぎれもなく、体験深化の主体者としてのひとがいる。野呂正著「絵本のなかの幼児の心理」が、「カメラは外界をコピーし、人間の知覚は外界を解釈して再構成する」と、以下引用のように述べているのも同じ趣旨である。

私たちの心は、外界や私たち自身のからだからの情報を取り入れること——客観世界の反映——によって形づくられ、発達していくものと考えられる。客観世界の反映と言っても、鏡のように、そっくり、そのままの形で、私たちのなかに映しだされるのではない。生まれながらの生理、解剖学的諸特性、これまでの生活の歴史のなかで刻みこまれてきた身体的、心理的諸特性など、個人および発達によって異なる内部条件をくぐって、情報は、取り入れられる。だから、この内部条件をくぐり抜けた後、私たちによって認識される情報は、客観世界に属する情報とは必ずしも一致しない。そこには、ゆがみが生じていたり、同じ情報を取り入れても、それは、個人によって、また発達によって、個性的な情報になりうるものであり、そして、個性的な心理特性をつくりあげる。(一部意識)

ひとは以上みてきたように、自分を環境の主座（中心）に据えながら、自分体験の機会と出会い、そのかわりの過程のなかで、ますます自分自身となっていく。以上このことを念頭に、個性あるいは個人性深化（自分化）の秘密について考えてみると、個人（自分）体験の深化がなければ、個人性の深化もまたないことがわかる。

事実、ひとは同じ映画や演劇、あるいは音楽や絵画に接しても、自分の見方や感じ方、うけとり方をしながら、自分化への体験を深めている。同じものを食べ飲んでも、その味の方に個人差があり、味覚もまた違っている。このほか同じ景観、例えば山野や湖沼、河川や海浜を眺め、あるいは空や雲、雪や雨、星や月、花や鳥、けものや魚貝に接しても、ひとはそれぞれ個有の受容の仕方をしつつ、個人性の深化を助けている。このような自分体験深化の諸例は、日常かぎりなくある。子供の誕生は誰にとってもうれしいことであるが、生みの母親は他者の誰もがおよばない、母親体験を自分化している。入学や卒業、就職や昇進は身内や知人、教師や学友にとってもうれしいことであるが、自分化の体験は当人だけのものである。結婚も離婚も、生別も死別も、体験深化の主体者は当事者にかぎられる。このようにひとは同じ客観的事象や事柄に出会っても、他人とは異なる主体的体験を通して、自分化（個性化）を促していく。これをまた個性の深化は、個人体験の主体的中心軸への凝集の帰結とみても同じことになる。

(三)体験の一般化 個人体験は一方では、すでにみてきたように、主体的自己中心軸への凝集深化という方向にはたらくと同時に、他方ではまた体験の遠心的拡散という方向に噴泉する。個人体験の中心軸への凝集が、個人性や個性の自分深化の過程であるとすれば、個人体験の遠心的拡散は、ひとの一般性や、共通性へまでの過程ということになる。これをまた個人性や個性の深化は、体験の主体的自己中心軸への凝集作用に依存し、ひとの人間性としての一般性や共通性は、個人体験の遠心的拡散に依存しているとみても同じことになる。

事実、ひとは個人として、他の誰とも異なる個性をそなえていると同時に、他方では他の誰とも同じ、人間としての共通性や一般性をもっている。このことは男女の性別や年齢、職業や立場、あるいは大人や子供などの区別によらず共通している。例えば美しい芸術作品を見たり、人生の出来ごとに出会って、美しいと感じる度合いに差はあっても、美しいと感じることにおいては同じである。醜惡な色彩や形に触れて、醜惡と感じる程度に違いはあっても、美しくないと感じることにおいては共通している。すぐれた音楽や演劇に接して、それによって触発される度合いは違っていても、心動かされることには変わりがない。こうした人間としての体験の共通性や一般性は、ひとが出会う生活上のことがらや、事象のすべてのことについていえる。子供の誕生は、身内以外のものには他人ごとであるが、子供の誕生を慶ぶことにおいては他人も共通している。学校の入学や卒業、あるいは就職や昇進は他人ごとであっても、そのこと自体を否定するものはいない。結婚を慶事として祝福し、離婚に同情するのは万人に共通している。生別や死別が、哀切であるという点について、否定できるものは誰もいない。成功を喜び、失敗や挫折に同情し、恋愛に喜びを感じ、失恋を悲しむことでも共通している。親が子供を可愛がり、夫婦が仲よくし、兄弟姉妹が睦みあい、隣人が扶けあうのもひとの一般性である。醜いことばらに出会って嫌惡の情をもち、美しいできごとを見たり、聞いたりして感動

しないものもない。そのことは例えば、1936（昭和11）年のオリンピック大会の思い出を記した、西田修平「つぎ合わせたメダル」（「学校図書」所載）という、つぎの一文を見てもわかる。

バーは4 m20に上げられた。午前中に行なわれた予選を通過した20名の選手によって、午後4時に棒高跳決勝が開始されてから幾時間後の今、この高さを試みる者わずかに5名、それはアメリカ選手のセフトン、グレバー、メドウスの三君と、大江君にぼく。アメリカの三君は4 m35の記録を保持しているだけに、いずれもみごとなフォームで軽くこす。その強さにはほとんど甲乙をつけられない。この種目で、3本の星条旗がメインマストにかかげられるであろうとは、多くの人たちの予想したところであった。ぼくはあくまでベストをつくして、アメリカのトリオの一角をくずしたいとひそかに念じた。ポールをにぎって、ふみきりのスタートにつこうとしている大江君の顔からも、同じ決意がよみとられた。こうして、さいわいにわたしたちも、この高さを征服することができた。バーはさらに4 m25に上げられた。ここで世界記録保持者のグレバー君が調子がわるく、不運にもバーを落として失格した。自他ともに許した優勝候補第一のかれが、最初に敗退しようとは、だれも予想しなかったことだった。しかしグレバー選手は決しておろさず、友のかたをたたいてその健闘をうながし、また競争相手のぼくたちに、明かるい笑顔に向けてあいさつして退場した。実にりっぱな態度だと思った。ふいてもふいても顔はあせばみ、はだに大気の重圧を感じる。ふと見上げるスタンドのかなたに、オリンピックの聖火があかあかと燃えている。いつか夜のとぼりは深くたれこめて、大競技場はこうこうたる照明燈で、天然色映画のように照らし出されている。この巨大なコロッセウムの中央に、日米二対二の優勝争いが展開する。思えば熱戦すでに4時間あまり、全観衆は日米双方の応援にはっきりと二分され、ぼくたちの跳蹴の試みごとに、スタンドからは「オオエ。」「ニンダ。」の声援と拍手を送ってくれる。ここでバーをいくらに上げるかについて相談があった。ぼくたちは調子はよかったが、なにしろ午後4時の決勝競技開始以来、5時間になんなんとしている。おたがいにこの際、長びくことはこのましくない。一気に4 m35に上げることに一決した。ぼくたちは今まで35をとんだ経験はなかったが、必ずとんでみせるというかたい決意でこれにいどんだ。だがああ、4 m35。ぼくたちはとべなかった。セフトン君も落ちた。メドウス君のみがそれをあざやかにとんで、ついにぼくたちは無念の敗北をした。時に8月5日午後9時。緊張の5時間が去り、夏とはいえあせばんだからだに大陸の夜気がひえびえと感じられた。

このあと順位決定戦にセフトン君が等外に去ったので、大江君とぼくとで2等3等を争わねばならぬ運命になった。しかしこの大会をめざして寝食を共にして

きた大江君と、今さら何を争う必要があろう。ぼくたちは順位決定戦をやめて、仲よく2, 3等のメダルをもらった。そうしてこれを永遠に記念するために、それぞれ真二つにわり、銀銅のつぎ合わせという、おそらく世界のだれもがしたことのない記念メダルを作って、ふたりで持つことにした。その後、大江君は太平洋戦争でフィリピンで死んだ。ぼくのつなぎ合わせたメダルは、あの日あの時の感激をこめた、なつかしい大江君のかたみとなってしまった。

このほかつぎのような子供向けの物語、「あらしのボートレース」(「学校図書」所載)もある。大人であると子供であるとを問わず、これを読んで感動しないものはいないという点で、ひとの人間感情は共通している。

昭和32年5月12日、伝統の第26回早慶ボートレースが行なわれました。前夜からの雨はまだやまず、さらに春特有の強風を加えて、隅田川の水面には、かなり大きな波が立っていました。この一戦に備えて、早稲田と慶応の両大学ボート部の選手たちは、長い間はげしい練習を重ねてきましたが、試合前の予想では、慶応の勝利がほとんど確実であると見られていました。というのは慶応のボート部は、その前年のメルボルンオリンピック大会にも参加しており、その時の選手の一部が、まだ残っていたからです。しかしこの悪条件では、勝敗ははたしてどうなるかわかりません。慶応のかんとくは、レースに先だって、選手たちにむかって言いました。「みんな、全力をふりしぼってこいでくれ。この波ではボートの中に、水がはいってくるかもしれない。しかしボートレースというものは、あくまでもみんなが力を合わせてこぎぬく競争だ。もしはいってくる水に心をうばわれて、ふだんの練習の力をじゅうぶんに出せなかったら、相手の選手に対して失礼なことだ。どんな苦しいことがあっても、力いっぱい戦うことが、スポーツマンにとってたいせつなことなのだ。」一方、早稲田のかんとくは、「たとえ試合には負けても、けっして、ボートをしずめてはならない。ボートをしずめることは、ボートマンにとって、もっともはずかしいことだ。きょうは波がたいへん高い。もしボートに水がはいってきたら、4人でこいで、残りの4人は水をくみ出してもいい。みんな最後までがんばって、ボートをしずめないでくれ。」と言って、各選手に水をくみ出す器をわたしました。

スタート直後、両国橋付近までは、予想どおり、慶応がだんぜんリードしていました。かさをさして試合を見ていた観衆も、ほとんどその勝利を信じていました。ところが、蔵前橋を過ぎるころから、慶応のボートはしだいにおくれ、早稲田がじりじりと差をつめ始めました。慶応のボートには、だんだん水がはいって、ついには選手のこしをぬらすほどになってしまったのです。それでも選手たちは、

だれひとりオールを放さず、力いっぱいこぎ続けました。しかしついにゴールにはいれず、ボートはしずんでしまいました。早稲田のボートでは、水がはいってくると、何人かの選手がくみ出し係になって、はるか前方に行く慶応のボートの速さに、くちびるをかみながらも、少ない人数でこいでいました。しかししん水で速力のおとろえた慶応を、駒形橋の近くで追いぬき勝敗は逆転したのです。ところが岸に上がった早稲田の選手は、しんばん長に、試合のやり直しを申し出ました。「これは、真の勝利ではない。この悪天候では、ほんとうの力が出せない。」というのです。しかししんばん員の相談の結果、申し出は採用されず早稲田の勝利と認められました。慶応の選手たちは、「試合に対する準備が足りなかったのだから、早稲田の勝利は正しい。明らかに敗れたのだ。」と言って、早稲田の勝利に、心からのほく手を送りました。

ひとのこのような人間としての体験の共通性、あるいは一般性は、自分体験の遠心的拡散によって形成され深化する。真なるもの（真理）や善なるもの（道徳）に近づき、美なるものや聖なるものに憧憬するのは、ひとの本性（自然）ではあるが、その噴泉表出は、自分体験の深化にもとづく、一般化への遠心的拡散によっている。「我が身をつねって、ひとの痛さを知る」のであり、自分の子供が可愛いからこそ、他人の子供も可愛いくなるのである。自分に痛みや挫折の体験深化があるからこそ、他人の痛みや挫折もわかるのである。自分に失敗や成功の体験深化があるから、他人の失敗に同情し、成功を喜ぶことができるのである。自分に貧窮の体験があるから、貧者の一燈の尊さもわかるのである。子供を理解しようとすれば、自分も子供時代に、子供体験を多様に育てていることが重要である。すぐれた教師になろうとすれば、すぐれた教師にも出会い、悪しき教師にも、ともに出会った子供体験が必要である。この意味でいえば、ゆたかな教師には共通して、子供時代の多様な子供体験の累積深化がみられる。この点でみるかぎり、人間的ですぐれた教師は、すでに子供時代につくられているといっても、けっしていいすぎとはならない。いずれにしてもここで重要なのは、自己体験の深化という点にある。ひとの人間性としての共通性や一般性は、自分体験の外部への遠心的拡散の帰結によるからである。

ひとはこうして、日常茶飯のささやかなことがらや、人生の転機をともなう非常な出来ごとをふくめ、時々刻々の現瞬を体験しつつ、自分化（個性化）と一般性、あるいは共通普遍性への過程を生きている。この点でいえば体験の深化は、いよいよますます自分化（個性化）への過程であるとともに、また同時に人間性へまでの深化、共通一般性へまでの過程であるということになる。個性化とは他の誰とも異なる、自分だけの特質をもつということであり、一般化あるいは共通化とは、ひととしての人間性や自然本性、社会性や文化感覚、愛や犠牲や奉仕など、人間普遍の価値意識を身につけるということである。これをまたひとから人間性へまでの教育、あるいは広く人間形成とよんでも、その内実は同じことになる。その主座を占めるのは、すでにこれまで繰り返かえしみてきた、形成的環境における、ひと（主体）そのものであることはいうまでもない。形成的環境のなかのひと（person）の位置が、あらためて問われるのもこのためである。

参 考 文 献

- (1)原田実 人間形成の明日 (2)Rousseau,: Émile ou De L'Éducation, (押村襄訳 エミール) (3)Dewey,: Experience and Education. (原田実訳 経験と教育) (4)Gesell,: Wolf-child Human child., (生月雅子訳 狼にそだてられた子) (5)Helen and Teacher-The story of Hellen Keller and Anne Sullivan Macy (中村妙子訳 愛と光への旅) (6)西田正好 日本文学の自然観 (7)安藤次男 近世の秀句 (8)島崎敏樹 心で見える世界 (9)秋葉芙利 乳幼児の発達と活動意欲 (10)Dewey,: Democracy and Education, (松野安男訳民主主義と教育) (11)平井富男 心の四季 (12)阿部正路 風土と詩人たち—石川啄木 (13)金子光晴 現代詩鑑賞 (14)齊藤响 唐詩選 (15)松尾芭蕉 奥の細道 (16)池田弥三郎 風景論 (17)鷹司綸子 服飾文化史 (18)春山行夫 おしゃれ文化史 (19)The Story of my life (岩崎武夫訳 わたしの生涯) (20)原田泰治 わたしの信州 (21)佐藤忠男 映画館が学校だった (22)野呂正 絵本のなかの幼児心理 (23)小岩井由紀子 詩「私の手」 (24)西田修平 つぎ合わせたメダル (25)学校図書 あらしのポートレース